

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻公開講座

LCセミナー2023:言語文化学の展望

本専攻では、平成14年度から毎夏開講してきた「教員のための英語リフレッシュ講座」を発展的に解消し、令和3年度から新たな公開講座「LCセミナー」をスタートさせました。LCはLanguage and Cultureの頭文字で、本専攻の母体となった言語文化部の時代から親しまれてきた略称であり、本講座では、これからのグローバル化社会の発展に必須である、最新の言語文化学の知見に触れる場を提供します。令和5年度は「言語文化学の展望」と題して、超領域文化論、第二言語教育学、理論言語学・デジタルヒューマニティーズの幅広い分野の第一線で活躍中の本専攻の教員が、それぞれの研究成果について専門外の方々にとってもできるだけ親しみやすい言葉で解説します。3つの異なる分野の講義をきっかけとして、コロナ後もなお続く困難な世界情勢の中で、広く「言語」と「文化」について考えてみませんか。本講座を通して、参加者の皆さまが言語文化学に興味を抱いていただけることを願っています。

- 日 程 令和5年9月16日(土)13時～16時40分(予定)
 - 会 場 オンライン(Zoom)にて開催
 - 受 講 料 無料
 - 定 員 300名(先着順、定員に達した時点で大阪大学 大学院人文学研究科
言語文化学専攻HPに掲示します)
 - 受 付 期 間 8月7日(月)～9月14日(木)
 - 申 し 込 み 次のリンク先のフォームからお申し込みください。
<https://forms.gle/LxuzpY1E7v9A1MMw6>
 - 問い合わせ 大阪大学 大学院人文学研究科 豊中事務部総務係
(E-mail: jibun-soumu@office.osaka-u.ac.jp TEL: 06-6850-5855)
 - プログラム
- | | | | |
|-------------|---|------------------|------------|
| | | 司 会 | 早瀬 尚子 教授 |
| 13:00～13:10 | 開会の挨拶 | 人文学研究科 言語文化学専攻長 | 山本 佳樹 教授 |
| 13:10～14:10 | 講義1: 文化の腹立たしさ | | ガデミ アミン 講師 |
| 14:20～15:20 | 講義2: 語彙学習をめぐる理論と実践:
定型表現・処理の量と質・情動関与処理 | | 金澤 佑 講師 |
| 15:30～16:30 | 講義3: 丁寧語の研究に見る理論言語学・デジタルヒューマニティーズ・
史的言語研究の融合 | | 山田 彬亮 准教授 |
| 16:30～16:40 | 閉会の挨拶 | 人文学研究科 言語文化学副専攻長 | 里内 克巳 教授 |

*大学院人文学研究科の情報は以下のサイトでもご覧いただけます。

人文学研究科 HP

<https://www.hmt.osaka-u.ac.jp/>

人文学研究科 Facebook

<https://www.facebook.com/HmtOsakaUniversity/>

人文学研究科 Twitter

https://twitter.com/ou_hmt_info

司会者・講師プロフィール & 講義内容

司会 早瀬 尚子 言語認知科学講座 教授

- プロフィール: 博士(文学)。専門は認知言語学分野における構文論。著書に「懸垂分詞構文を動機づける内の視点」(『「内」と「外」の言語学』編著書、開拓社 2009)、『認知文法の新展開—カテゴリー化と用法基盤モデル』(共著書、研究社 2005)『構文の意味と拡がり』(共著書、くろしお出版 2017)『認知文法・構文文法』(共著書、開拓社 2020)、『構文と主観性』(共著書、くろしお出版 2021)など。

文化の腹立たしさ ガデミ アミン 超領域文化論講座 講師

- プロフィール: PhD(歴史および東アジア言語)。専門は、思想史、文化史、近代日本のグローバル史。著書に、『The New Cambridge History of Japan: Volume 2』(分担執筆:ケンブリッジ大学出版社、2023年末出版予定)など。論文に、「Arai Shōgo and His Global Civil War, circa 1885」Journal of Social History(オックスフォード大学出版社)など。
- 講義内容: 文化を研究する人には、「文化」という概念が嫌いな人が多く見られます。というのも、「文化」とは、なかなか腹立たしい概念だからです。まず、意味不明です。文化5年フェートン号事件の文化、文化シャッターの文化、多文化共生の文化、そして英語の“bacterial culture”(細菌の培養)の「カルチャー」(=文化?)は、明らかに、同じ概念を指しているわけではないです。でも、すべては「文化」だから、関係ないわけでもありません。また、「文化」とは、差別や排他主義を正当化する都合の良い婉曲表現だと言う人もいます。文化は、権力や支配、暴力や覇権を偽装して永続化させる手段なのでしょうか。社会の基礎にある物質現実や経済搾取を不可視化させる上部構造にすぎないものなのでしょうか。この講義では、英語圏の顕著な研究を解説していくことで、文化のこのややこしさ、この腹立たしさを一緒に体験していきます。意外と楽しい腹立たしさです。

語彙学習をめぐる理論と実践: 定型表現・処理の量と質・情動関与処理 金澤 佑 第二言語教育学講座 講師

- プロフィール: 博士(言語コミュニケーション文化)。外国語教育メディア学会(LET)関西支部基礎理論研究部会部会長兼プロジェクトリーダー。専門は、外国語教育学(特にディープ・アクティブラーニング教育実践)、応用言語学(特に語彙)、感情の哲学、認知心理学など。著書に、『フォーミュラと外国語学習・教育:定型表現研究入門』(編著:くろしお出版)、論文に「Micro-level emotion as a factor of L2 vocabulary memory: The effect of lexical valence on incidental recall performance」(Language Education & Technology)、「Do not (just) think, but (also) feel!: Empirical corroboration of Emotion-Involved Processing Hypothesis on foreign language lexical retention」(SAGE Open)、「高等教育活動におけるディープ・ポジティブティ仮説と認識情動」(感情心理学研究)など。
- 講義内容: 外国語学習には様々な側面がありますが、その中でもっとも根本的かつ重要なものの一つとして語彙学習があげられます。本講演では、近年ますます語彙研究において注目されている定型表現(フォーミュラ連鎖)の分類や学習方法、研究例などを紹介します。さらに、語彙知識の諸相についてまとめたうえで、語彙学習の成功のために重要な処理の「量」と様々なレベルの「質」について、認知心理学や応用言語学の理論や具体例をふまえながら解説します。特に、深い学習に関連する「情動関与処理(Emotion-Involved Processing)」の重要性や可能性について、哲学や神経科学を含む学際的な知見や研究をもとに論じます。講演を通じて、語彙・フォーミュラ指導の具体的なアイデアについても紹介します。

丁寧語の研究に見る理論言語学・デジタルヒューマニティーズ・ 史的言語研究の融合 山田 彬亮 理論言語学・デジタルヒューマニティーズ講座 准教授

- プロフィール: ジョージタウン大学で言語学の博士号を取得。専門は、デジタルヒューマニティーズ、コーパス言語学、理論言語学、言語変化・変異。代表的な研究に Looking for default vocabulary insertion rules: diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system (Glossa: a journal of general linguistics)、Honorificity (The Wiley Blackwell Companion to Morphology)、Honorific (mis)matches in allocutive languages with a focus on Japanese (共著: Glossa: a journal of general linguistics)など。
- 講義内容: 日本語の話者の中にも敬語が苦手な人はいます。ただ、苦手な敬語として「お訪ねになる/する」のような尊敬語や謙讓語の選択が挙げられることはあっても、丁寧語の使い方が挙げられることはほとんどありません。「象です」というべきところで間違っ「(x) 象ます」と言ってしまったなんてことは多分ありませんよね。このように使うことはとても簡単な丁寧語なのですが、言語学的にみると日本語の丁寧語には、世界の言語の丁寧語と比べてみると、とても「おかしい」性質がたくさんあることが知られていて、理論言語学の分野で大きな注目が集まっています。今回の講義では、前半で、どのような「おかしさ」があるかをご紹介します、後半でそのうちの一つである歴史変化に焦点を当て、デジタルヒューマニティーズ(DH)で用いられる応用統計的な研究手法を使ってどのように言語変化が捉えられるのかをお見せしたいと思います。本専攻の分野IIIは、DH、理論言語学研究、史的言語研究という三つの柱からなっていますので、これらの研究分野がどのように本専攻で融合しているのかというその姿を、丁寧語研究を素材に皆様にご体験いただければと思います。